

第2回シンポジウム—5

儀礼を通して 「インド的文明」を通覧する

永ノ尾信悟

3000年以上の歴史をもつインドの文化を考える場合、紀元前6世紀前後に登場してきた宗教思想が前面に置かれる場合が多い。厭世的な世界観を背景に、苦しみの根源とされる輪廻からの解脱を求めるさまざまな流れである。その流れの底流に、神々をまつり、あの世のみならず、この世における人間の多様な願望を満たすことで幸福をつかもうとする営みが連綿として続いてきた。この儀礼の流れを通覧することにより「インド的」なものの大きな一面をさぐってみたい。

1 はじめに—この世におけるしあわせを求める流れ—

2 ヴェーダの祭式と儀礼

2-1 大規模なヴェーダ祭式

3種類のヴェーダ祭式：ソーマ、パシュ、イシュティ

いくつかの例：アグニホートラ、ダルシャプルーナマーサ、チャートウルマースヤ、パシュバンダ、アグニストーマ、ラージャスーヤ、アシュヴァメーダ、ガヴァーム・アヤナ

祭式解釈文献（ブラーフマナ）の祭式解釈：チャートウルマースヤを例として

2-2 家庭の儀礼

3種類の家庭儀礼：人生儀礼、年中儀礼、その他の儀礼

2-3 呪術の世界

病気の治癒儀礼、人を呪う儀礼、償いの儀礼

2- 4 死者の儀礼

葬送儀礼、祖霊への儀礼

3 ポストヴェーダ期の儀礼

3 - 1 プージャーの形成

3 - 2 年中行事のカレンダー

3 - 3 聖地巡礼

4 現代の村に見られる儀礼

5 おわりに—この世のしあわせを求める大きな流れ—

付記・この発表の詳しい内容は「儀礼と文化の変遷」と題して、奈良康明・下田正弘（編）、2010、『仏教出現の背景』（新アジア仏教史 01 イント）、佼成出版社、179-214 頁に掲載された。

えいのお しんご ●東京大学東洋文化研究所（seino@ioc.u-tokyo.ac.jp）